
D N A

† 李陽 †

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DNA

【Nコード】

N2605BA

【作者名】

十李陽十

【あらすじ】

田舎過ぎず都会でも無い町に住んでいる高校二年生の高橋 隼人。夏休みの始め、バイトが終了して家に帰った余り物の弁当を食べようとしたところ。

稲妻と共にボロアパートの天井を突き破って一人の少女が降ってくる。銀髪、赤眼をした美少女だ。混乱する隼人に構うこと無く、強烈な一言を放つ少女。

「あなたの遺伝子を貰いにきました」

生殖遺伝子を採取する為に現れた、平行世界の地球人だというのだ。

クラスのアイドルに一途な思いを抱いていた隼人は、頑なに拒否する。

しかし少女も泣き落としを使って隼人を追い詰めた。

最終的に警察へ届けるわけにもいかなないと判断した隼人は、しぶしぶ部屋に住んで良いことを了承する。

「俺をホレさせてみせろよ！ そしたら……くれてやるよ……俺の遺伝子……」

平行世界人と奇妙な同棲生活が幕を開ける。

第 1 話 不幸体質 < Unhappy Attractor >

田舎では無い、かと言って都会かと言うと全然そんなことは無い。少し大きめのターミナル駅があり、駅前にはバスターミナルがある。でも、駅には駅ビルがある訳では無くて、少し大きめのスーパーマーケットがあるだけだ。

そんな町に住んでいる高校二年生の高橋隼人^{たかはし はやと}16歳。顔もブサイクでは無いが、取り立てて男前という訳でも無いし、身長も日本人男性平均の一七二センチ、体格は引き締まっではいるが、ムキムキという訳ではない。はっきり言えば普通というジャンルに入る男だ。そんなこの中途半端な町から在来線で二駅ほど上ったところにある県立高校に通っている。

家族構成は両親との三人家族だったが、事故で他界してしまい今は一人である。隼人は、両親が死んだのは自分の所為では無いか？ そんな風に考えていた。もちろん、自分が直接関わって両親が事故に合った訳では無い。そんな考えに到った理由というのは、隼人が生まれながらに持っている不幸体質^{アンハッピー・アトラクター}による物だ。

小さい頃から、遠足の日になると前夜食べた物にアレルギー反応^{しょくあたり}又は食中^{しょくちゅう}りを起こして遠足には参加出来なかったり、国際的テロが発生して遠足その物が中止になったりした。洩れなく貰えるというキャンペーンに応募しても貰えない事すらある。

そんな不幸な隼人にも他の人と等しく訪れる幸福という物がある。今日は終業式、明日からは夏休みなのだ。何度追ひ払っても現れる、隼人の寝室の網戸に止まる蝉が奏でる鳴き声^{ふつぶつし}も、今日ばかりは夏らしくて良いとさえ感じさせられてしまうから不思議である。もちろん、夏だから、夏休みだからと隼人に幸運が訪れる訳では無いし、一夏のアバンチュールがあるとも思えない。ただ、高校生らしく長い休みがあるというだけで幸せに感じてしまうのだ。

隼人は本日の予定を確認する。

（今日は……終業式が午前中で終了。一三時には帰宅出来る。午後
は……一五時から弁当屋のバイト。夜の二一時に終了予定と）

終業式からバイト開始までの時間が微妙に、というか中途半端に
空いている。何かしたいような気がするけど、何も出来ない、そん
な中途半端な時間だ。こんなことも隼人にとってみれば日常茶飯事
だ。その微妙な時間については、学校に少し残って、恐らく配られ
るであろう、夏休みの宿題を進めて、バイトの時間に合わせて学校
を出れば万事問題無い。

隼人は、中学時代からの癖で付けている手帳を確認した後閉じ
ると、制服のお尻にある左ポケットに突っ込む。隼人はお尻の右ポ
ケットに長財布、左ポケットに手帳。そして、前ポケットの右に鍵を
入れるのが習慣だ。

元栓、蛇口、窓の戸締り、ボイラーの電源、部屋の電気、電源プ
ラグ全てを指差し確認でチェックしていくと、スポーツシューズを
突っ掛けて外に出る。部屋のカギを掛けた後、指差し確認でチェ
ックすると、学校に向かうのだ。隼人は自らの不幸体質を過小評価は
しない。何か小さな切っ掛けでも残そう物なら、いつ牙を剥くか分
からないのだ。

隼人は、自転車置き場で三重カギを付けた中古購入の四代目ママ
チャリのパンク確認を手早く済ませると、それに跨またがって駅へと向か
う。もちろん、途中でも細心の注意を払ってだ。隼人の敵は、ある
意味アメリカの特殊部隊など目じゃない程の強敵である。ヘタをす
ると空を飛ぶ天道虫てんとうむしすら死に直結する程の脅威になりかねないのだ。
ただ、殺伐とした雰囲気はばら撒きながら登校できるほど非常識
では無い。あくまで意識だけを注意に払い、見た目には到って普通
に見せる。その技を身につけるまでは、殺気立った視線を周囲にバ
ラ撒いていた所為で、外を歩けば不良に絡まれるなんていうのは、

もはや日常だった。最初は謝って許して貰っていたが、性質が悪い中にもピンからキリまでいる。中には問答無用で手を出してくる者もいるのだ。中学一年の時に、殴りかかられた際防御するために上げた手の肘が相手の顎先にクリーンヒットし、それ以降は謝ってダメな際は撃退する必要があるってしまった。そして、撃退した数が増えて行くと、今度は挑んでくる者まで出てくる。それに関しては謝って許して貰うと言う選択肢が、そもそも存在しないので益々撃退数は増加して行った。気付くと周囲では有名な不良の中にラインナップされてしまっている。なんとも不幸である。

そんな事があった所為で、成績や学校での態度が良かったにも関わらず、推薦入試が出来なかった。仕方なく、近くでも一番まとまな県立高校を受験して合格を勝ち取ったのである。

あの時は大変だった……等と考えながら、改札口を無事に通過、何事も無く電車に乗り込んだ。

（オカシイ……こんなに何も無い朝は初めてじゃないか？）

隼人が、そんな疑問を浮かべ今以上の注意を払いながら学校に辿り着くも、やはり何も起こらない平和な登校で終わった。もしかしたら、終業式や下校で起こるかもしれない。しかも、朝起こらなかった不幸が上乘せされた物が来る可能性すらある。そんな考えから周囲にも分かる程の殺気立ったオーラを放ちながら終業式を無事に終えて、ついに最後のホームルームまで辿り着いた。

（まさか……このまま何も起こらないなんて事があるんじゃないか……）

隼人の心配とは裏腹に何事もなく終了するホームルーム。クラスメイトが置き¹勉強していた教科書類をカバンの限界に挑戦するようにパンパンに押し詰めて帰っていくのを尻目に、バイトの時間まで中途半端に空いた時間を甲子園を目指して練習する弱小野球部でも眺

めながら夏休みの宿題を進めようかと教科書を開く、すでに帰宅の途に付いたはずの前席の椅子が引かれた。

何か忘れ物でもしたのだろうか？ それとも遂に一発目の不幸がやってきたのか？ そんなことを考えながら視線を教科書から上げると、隼人の目に映ったのは有り得ない光景だった。

なんとクラスで一番人気、いや……学年でも五本の指に入るほどの人気を誇る上野菜緒うえの なおが目の前に座っていたのだ。こげ茶に染めたセミロングの髪の一部をちょっとだけ縛ってアホ毛のような毛束を作った髪型。色白で背も少し低め、おそらく一五〇センチ弱。全体的に線が細いのに、しっかりと主張する胸。ナチュラルメイクでもしっかり自己主張する目はしっかりとした二重だ。そんな上野菜緒が隼人の目の前に座っている。しかも、周囲を見渡してみると、廊下でこちらを伺いながら内緒話をしている上野菜緒の友人数名がいるだけで、教室自体には隼人と菜緒を除いて誰もいないのだ。隼人が意を決したように生唾を飲み込んでから声を掛ける。

「ど、どうしたの上野さん」

ドモった。自分で考えていた以上に隼人は緊張していたようだ。薄く頬を桃色に染めたまま、若干の間を置く上野に隼人の期待が最高潮を迎える。

上野が少し潤んだ瞳を上げて上目遣いのまま、ナチュラルメイクにも関わらず艶のある唇を静かに開く。

「夏休み、なんだけどさ……さっき、私の仲が良い友達三人と、クラスの祐次君、高木君の五人で海に行くことになってね。あと一人男の子欲しいよね」って話になってさ、隼人君夏休みって暇ある？ 一緒に行かない？」

隼人は万歳三唱でもしたい気分になった。こんな気持ちは、サッ

カー日本代表がブラジルを倒した瞬間をテレビで見ていた時以来のことだ。

そんな気持ちをオブラートで包んだ上に和紙で更にデコレーション、ついでに漆^{うるし}まで縫^{ぬい}って光沢を出した後、胸の奥に仕舞いこみ、徐^{おもむろ}にお尻の左ポケットから手帳を取り出す。

「何日？ 日程は決まってるの？」

よし、今度はドモらずに話することが出来た。上手く平静を装うことが出来たと、心の中で盛大な溜息を吐きだした。

輝くような笑顔を浮かべて、携帯電話を取り出す上野、それを見た隼人は内心で『あちゃ〜……』と思っていた。

「隼人君、携帯電話持つてるよね？ 日程決まったら連絡するから番号とメアド交換しよ！？」

「ゴメン、携帯持っていないんだ……」

まさか、こんな”えげつない”方法で来るとは、甘く見ていたよアンハッピー・アトラクター不幸体質。隼人が内心、泣きながら、だけど表には出さず苦笑いを浮かべると、何故か上野が少し泣きそうな顔をしていた。

「ど、どうしたの！？」

「私に、番号教えたくないの？」

そう、今日^{きょうび}日、小学生すら携帯電話を持つてる時代である。高校二年生にもなつて、携帯電話を所持していないというのは、今時珍しいのだ。

そんなことよりも、今は上野が泣きそうな顔をしていることの方が、隼人にとっては大問題だ。直ちに対応する必要がある。しかし、悲しいかな本当に携帯電話は持っていないのだ。

「う、上野さん！？ 本当に携帯持っていないんだ。俺の家って一人暮らしで生活費とか、自分でやりくりしてるから、携帯電話の基本料金さえ出費はキツくてさ！」

上野の表情がみるみる明るくなる。最終的には、またキラキラ輝くような笑顔に戻っている。いや、心なしか先ほどよりも輝いて見えているのは、隼人の眼が勝手に付けているエフェクトなのかと言えば、それはちょっと違うようである。

「隼人君って高校生なのに一人暮らしなの！？」

一般的に地元の高校に通う色が強いこの中途半端に田舎な地域は、高校進学の為に一人暮らしするような人は多く無い。もし、親元を離れて暮らすとなれば、それは全寮制に入ることの意味している。それくらい考え方が古い地域なのである。そこに、一人暮らしをしている高校生が一人入ると、途端に溜まり場扱いされるのは目に見えて明らかだ。そんな理由から”一人暮らし”ということを秘密にしていたのだが、まさかこんなに早く切り札を切ることになるとは、隼人は考えていなかった。

「ああ……うん。皆には内緒だよ？」

「内緒……うん！ 二人だけの秘密ね！」

上野の表情が眩しい。隼人には太陽に虫眼鏡を向けたように眩い光が降り注いでいるかのように感じていた。

「でも、そしたら……予定が決まっても連絡取れないね……」
「ああ……うん。仕方ない」

隼人は手元にあつたノートの一部を切り取ると、ボールペンで住所を書き込んでいく。手元が明るく感じたのは気の所為ということにしておこう。隼人は、気持ち急いで住所を書き上げると、裏面に簡単な地図を描き入れて上野に渡した。

「これも、皆には内緒でよろしく。日程が決まったら、手紙でも出してよ」

「内緒ね！ 大丈夫よ！ じゃあ日程が決まったら、教えに行くね！」

「いや、手紙で」

「なんだか今年の夏は楽しくなりそう！ じゃあ、友達待たせてるから！ またね！ 隼人君！！」

隼人は静止を呼び掛けるべく出した右手を静かに下ろすしかなかった。遠くで、『どうだった？ どうだった！？』『一緒に行つてくれるってさ！』『携帯番号はゲットしたの！？』『それは……内緒！』『ズルイんだけど！ 私にも教えてよ！』『ダメ！ だつて 二人だけの秘密 だもん！』『意味深だね』という内容が聞こえて来たような気がしたと同時に、隼人は自らのスルースキルがレベルアップした幻聴を聞いたような気がした。

なんだか一気に疲れた気がしたが、一応当初の通り、一時間ほど夏休みの宿題を進めると、バイト先に足を向けた。

バイト中も特に不幸は発生しなかった。いつもであれば、店の今までカラスが入り込んで、作りたての唐揚げを攫っていくこともあるのだが、さっきのような一見すると幸せな不幸というトラップもあるから気を引き締める必要があると、隼人は心を引き締めていた。高校生が許されている時間まかないのギリギリまで働いた隼人は、このバイト特有の特権である賄いを食べる時間も無い代わりに、少し冷めてしまった売れ残りの弁当を最大三つまで持ち帰って良いというルールを行使すべく冷めた弁当ラインナップに視線を落としていた。

もちろん隼人は三つ持ち帰る。鍛えこまれた嗅覚で持つて、一番状態が良い物を選ぶ、本日は、この店で売れ筋のナンバーワンのハンバーグ弁当、ナンバーツーの唐揚げ弁当、そして隼人の大好きな山菜おこわ弁当の三つだ。

これは、後で大きなしつぺ返しが来ると、こころを引き締めながら帰路に付くも、何事も無く自宅へと辿り着いた。着くなり、窓を開けて籠った空気を追い出すと、制服をハンガーに掛けて、タンクトップにハーフパンツという格好に着替える。

きつとたまには神様も俺の様な不幸体質に休息をくれるのかな？ などと考えながら、部屋の真ん中にある”ちゃぶ台”へ弁当を広げた。

手を合わせて『いただきます』を言おうと口を開いたその時、開けていた窓から強めの風が吹き込んでくる。外で雷雨を伴う大雨が通りかかったのだろうか。そんなことを考えながら、窓を閉じようと立ちあがり、窓に手を掛けた瞬間、眩しい光と共に大きな稲妻の音が響いた。

少し送れるように響く振動。明らかに自分の真後ろに大きな力を持った何かが、物理的破壊を伴って、隼人の弁当を粉々にしたことが窺えた。^{うかが}咄嗟のことで何も出来ずに外を見たまま佇む隼人。^{たたずむ}

まさか、油断した瞬間にこんな仕打ちとは、部屋に雷が落ちるなんて有り得ない。それでも死ななかつたというのは、むしろ幸運なのか？ 自分でも答えが出ないような、半ば自らを慰めるような思考に浸りながら、振り返った隼人の目には信じられない物が映っていた。

大きくはないシルエット。透けるように白い肌。銀色で長い真っ直ぐの髪。大きく少し釣り上がった目。長いまつ毛。真っ赤な瞳。近未来映画に出て来そうな布の少ない服。スレンダーな手足。自己主張しすぎない胸。見たことも無い機械。それらで構成された、一種の神々しささえ感じる少女を最後に彩るのは、少し幼くも見える

が整った顔立ち。誰が見ても同じように評価するだろう。『美少女だ』と。

その『美少女』が、ゆっくりと立ちあがる。天井こそ大穴が開いているものの、弁当は全て無事、ちゃぶ台も現在土足で踏みにじられていないが形状を保っている。『美少女』が一步踏み出す。すると、細い四本脚によって絶妙なバランスを保っていたちゃぶ台が、バランスを失って引っ繰り返る。宙を舞うさっきまでは奇跡的に無事だった弁当達は、敢え無く床へと落下しゴミ箱へ直行すること間違いない状態へと変貌を遂げた。そして、当然一緒に引っ繰り返った『美少女』は床に顔面を強打し、沈黙している。

少しの間を伴って、顔をあげた『美少女』は鼻の頭を赤くしながら、恥ずかしげも無く言い放った。

「高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いに来ました」

第 1 話 不幸体質<Unhappy Actor> (後書き)

1) 置き勉……教科書や参考書などを学校に置いていく習慣の事。
基本的に自宅で勉強することが無い人に多く見受けられる。そういった人物は習慣的に宿題もやってこない為、真面目な友人の助力でもって学校生活を送っている傾向にある。

第 2 話 平行世界<Parallel World>

遺伝子、それは生物が保持する自らの設計図であり、種を保存する為に残すべき情報体である。生物は様々な方法で種の保存に努めてきた。例えば無性生殖、これは単体で子供を増やすのだ、自分と全く同じ性質をもった個体を作れるということは、最低限の性質を保証できるということである。弱い者が淘汰されていく中で、強い者程たくさん生き残るという考えの元、自らと同じ個体を作り続けると言う性質がある。対して有性生殖とは、種に多様性を持たせることで、適応力や免疫力を強くし、様々な環境においても種が保存される可能性を高めることを目的として行われる側面がある。この二つの面から見ても、遺伝子は生物を構成する上で、重要な因子なのだ。

隼人の部屋に突如として現れた『美少女』は、隼人にその重要な遺伝子を貰いに来たと言ったのだ。

「もう一度言いますね。高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いに来ました」

まさか、あの衝撃の一言を二度言われることなど考えてもいなかった隼人は、二度目の衝撃で逆に少し冷静になることが出来た。少し頭の中を整理しながら、質問を考える。

「ええーっと……まずは、どこから来たんですか？」

隼人の質問に対し、隼人の目を直視したまま瞬きをすることなく見続けた『美少女』は、少し間をおいてから口を開いた。

「私は、第五並列宇宙太陽系第三惑星地球より参りました」

「第五並列宇宙？ え？ 何？」

「第五並列宇宙太陽系第三惑星地球です」

『美少女』の話を、『この子、頭大丈夫かな？』と考えた時、不意に見上げた視線の先には天井に穿った大きな穴。隼人は、仕方なく彼女が言うことを信じてみようと考えた。

「それじゃあ、ここはどこなの？」

「ここは、高橋隼人さんが高校入学と同時に転居してきた築四七年の古アパートです」

「そうだけど、そうじゃなくて……さっきの第五並列なんとかって奴で言った時さ」

「ここは、第二五八〇並列宇宙太陽系第三惑星地球、日本列島、本州、関東平野に位置する埼玉県の、とある築四七年の古アパート、六畳風呂無しシャワーのみ、共同トイレ、一口コンロが標準装備の家賃が月二万八千円という部屋です」

「詳細すぎる内容に涙が出そうだわ……ってか並列宇宙っていつばいあるんだねえ、何それオイシイの？って感じだな。それで？

君の名前は？」

「？ 食したことがありますので、先の質問には応えられません
が……私の名前は、パパラリット・ストリアヌス・ブルグリアント
リップア・ムヌアデイロ・ヴァイヴァブロ・ロクス・リーナ・テレ
スタです」

「長っ！ 長い！ 長すぎるよ！ 舌嚙んじやうよ！ 面倒だから
テレスタって呼ぶよ！」

「えっと……コードネームはリーナです」

「最初からリーナで良いよ……んで、リーナは何をしに来たって？」

「三度目は想定外でした。高橋隼人さん、あなたの遺伝子を貰いに
来ました」

隼人は、むしろこちらが想定外の連続ですよ、リーナさん。思っていたが、そんなことよりも前言と同じく『遺伝子を貰いに来たらしい』このリーナという少女に、どう対応した物かと悩んでいた。とりあえず、建設的な意見が思い浮かんだので、隼人は質問してみることにした。

「髪の毛でも切って渡せば帰ってくれますか？」

「現在、高橋隼人さんが保有する髪の毛に含まれている遺伝子情報量では目的を達成するには量、質ともに不足しています」

隼人は『まさか』と思いながらも、質問せずにはいらなかった。

「さ、最善の手段は？」

少し応えにくそうに手をモジモジさせ、少しずつ赤くなる頬に、隼人は『まさか』が『本当』になることを予感していた。

「えっと……生殖活動により、生きた新鮮な遺伝子情報を獲得することで目的の達成が可能です」

予感的中した解答に隼人の口は、開いたまま塞がらなかった。

「それはダメだ！」

「なぜですか？ こちらの座標における生殖活動は盛んに行われています。こちらの第二五八〇並列宇宙太陽系第三惑星地球、日本列島では現在『夏』と呼ばれる動物の活動がピークを迎える季節だと調査結果に出ています。高橋隼人は現在一六歳であり、そういった行為に対して未経験の者が一番夢を抱いている時期だと調査結果には出ています。こちらの言葉で表すと『一夏の思い出』『一夏のアバンチュール』と称される物です」

「それは！……そうかもしれないが、それでもダメだ！俺には好きな娘ひとがいるんだ！俺の純潔は、その娘ひとに捧げるんだ！」

今時、珍しいかもしれないが隼人は一途で頑固だった。例え相手が美少女であろうと、恋心も持たない相手と”そういう事”が出来ない位に純粹で、馬鹿だった。

隼人の台詞に対して、リ・ナは驚愕の表情を浮かべて焦り出した。

「ええ！！！！困りました。隼さんの純潔にて生殖活動を行うことが最低限であり、最高でもある目標なんです！どうすれば、純潔を頂くことが出来ますか！？」

縋るように涙を浮かべるリーナを前に冷や汗が止まらない隼人。

隼人が『この娘は正気か？』と考えるのも無理のないことだった。

というのも、隼人に拘こたわる必要は無いのだ。隼人の同級生を思い浮かべてみても、自分より男前や頭が良いヤツなんかも沢山いるのだ。自分が誇れることと言ったら、泣きなくなるほどの不幸体質アンハッピー・アトラクターだけだ。

「もしかして、これも俺の不幸体質アンハッピー・アトラクターのせいなのか……」

他の純潔男子が聞いたら狂気を貼り付けた表情で襲いかかって来そうな発言だったが、幸いにして幸運、ここには隼人以外には男子がいない。

「それでは、私に高橋隼人さんとの共同生活をお許し下さい」

「なんでそうなる！？」

「高橋隼人さんが現在必要と考えている物は、『恋心』という物ですよね？それを私に懐いだいて戴いたかなくては、目標を達成することが出来ません！」

「年頃の男女が共同生活なんて！ダメに決まってる！」

「そうですか……」

しょんぼりと頂垂れるリーナ、なんとも哀愁漂う姿である。銀色の髪の毛は、見るからに幸が薄そうで、涙を浮かべる赤い瞳は、まるで宝石のように輝いていた。

「それでは……私はここを出て行くことにします。高橋隼人さんの遺伝子を頂かなくては、私は元の宇宙に戻る事が出来ないのです、このまま外に出て、夜道を彷徨い、悪い人に乱暴されたり、食べる物もなくて飢えたり、そして……その内、野垂れ死んでしまうんですね。……うつ……ヒック……ヒック……」

隼人は追い詰められていた。こんな儚げな少女を夜道に放り出すなど、冷静に考えれば出来るわけがない。顔こそ日本人でも銀髪の赤い瞳なんてビジュアルロックバンドの追っ駆けくらいの物だろう。それに警察へ届けようにも、何より戸籍もパスポートも何もないのだ、身分を証明することも出来ない。不法入国と言えば不法入国だが、リーナの話によると強制送還については、いくら日本の高い技術力を持つてしても不可能だと思われた。色々な計算が行われた結果、答えは一つしか用意されていないことに気が付いた。

「ここに居て良い……」

小さく呟くように出した声は、近くを通る消防自動車のサイレンの音に飲まれてしまう程、小さな物だった。

「……ぐすつ……え？」

「だから！ここに居て良いって言ったんだ！」

「良いのですか？……ヒック……年頃の男女が……ぐすつ……共同生活なんて……ダメに決まってるんですよね？」

「ああ……だけど！ アンタの頼みを聞く訳にいかない！ 俺の家に家政婦として置いてやるだけだ！」

「ええ！！！！ それじゃ私、元いた宇宙に帰れないじゃないですか！？」

「ウルサイ！ ウルサイ！ ウルサァーイ！ ん……そしたら、アレだ……俺をホレさせてみるよ……」

「え？」

「だから！ 俺をホレさせてみせろよ！ そしたら……くれてやるよ……俺の遺伝子……」

しばらく呆けていたリーナの目からは涙が引き、勢いのある炎が灯っていた。

「分かりました！ 何としても高橋隼人さんを私にホレさせてみせます！」

「隼人で良い」

「ハイ？」

「だから！ 隼人で良い！ フルネームで呼ぶのは、この辺りでは普通じゃないんだ」

「分かりました！ 隼人！」

「呼び捨てかよ！ ”さん”は付けるよ！」

「ハイ！ さん隼人！」

「わざとやってんのか！？」

「ひゃあ！ すいません、隼人さん！」

一気に疲れた隼人が大きな溜息をつく、玄関の扉を乱暴にノックする音が部屋に響いた。隼人が覗き穴から来訪者を確認すると、血相を掻いた大家さんだった。『高橋君！？ 大丈夫かい！？ この部屋に雷が落ちたって連絡があっただけど！』と部屋の外で大きな声で騒いでいる。大家をそのままに窓の外から様子を伺うと、

周囲には野次馬の群れと消防自動車が二台、救急車が一台、パトカーが3台も出張る事件となっていた。

「ヤバイ！ リーナ！ 服脱いで！ 俺の服適当に着て！ その機械は押し入れに突っ込むんだ！」

「ハイ？ どうしたんですか！？」

「良いから早く！ ってか着替えさせるの面倒くせえし！ 時間も無いから！ ……リーナ！ 押し入れに隠れてて！」

隼人は、リーナを抱え上げると押し入れの上の段に寄せ、『絶対出てくるなよ！』と念を押した上で扉を閉めた。普通であれば、下段に隠れてもらうところだが、普段布団を出した状態の上の段は整理する必要もない調度良いスペースが空いていたのだ。

急いで玄関の扉のチェーンロックと鍵を解錠して扉を開けると、マスターキーを構えた大家さんとバールを構えた消防士がいた。

「隼人くん！」

「要救助者を確認！」

「わわっ！ 僕は大丈夫ですから！」

少し血走った目をしていた消防士と大家さんに無事を説明し、安全確認の為に中に入りたいという消防士と、ついでに大家さんには壊れた天井を見て貰う。ボロくて古いアパートだけど、大家さんは基本的にとても良い人なのだ。

「あちゃ〜……こりゃ〜……ダメだね」

「よく、こんな大穴を空ける落雷にあったのに無事だったね君」

「なはは〜……昔から悪運だけは強いんですよ……」

隼人は、自分で言っただけで悲しくなる嘘だと思っていた。そもそも

運が良ければ部屋の天井に大穴など空く訳が無いのだ。

「君は運が良いね」

「あはは〜……ありがとうございます」

「ここには、とても住めないねえ〜……新しい部屋を探してあげるから、明日まで我慢してね」

消防士の方が親切に、近くのコンビニで大きめのレジャーシートとビニールテープを買ってきて、天井の大穴を応急措置的に塞いだ上で撤収していった。大家さんもそれを見送ると、そのまま自宅へと戻って行った。

隼人は部屋に戻ると、押し入れに無理矢理押し込める形になってしまったことを謝る為に押し入れの扉を開けた。すると、丸くなって眠るリーナの姿があった。

両親が死んでから、ずっと一人で生活してきた隼人は、誰かと過ごす夜に少しの安息を感じるのだった。

第 3 話 幸せの笑顔 < Happy Smile >

「ええ……はい……すいません。ご迷惑をお掛けします」

隼人は時代に取り残されたように佇む近くの公園にある電話ボックスで、バイト先に急遽休みを入れてもらう為の電話をかけていた。すでにバイト先では住んでいたアパートに落雷があった事が噂として聞こえていたらしく。電話をした瞬間にバイトを休むことが予想出来ていたような対応だった。既に代わりに入ってくれるバイトを見つけていた準備の良い店長は、快く休むことを了承してくれた。

確かに落雷があつた部屋を引き払って別の部屋にいく必要もあるが、それより何より新たな同居人に対して社会のルールを教えてやる必要がある。それは実地も含めた極めて難易度の高い教育である。それを思うと、すでに抱えた案件が自分のキャパシティを遥かに凌駕していることに溜め息も出るが、気落ちしていても事態が好転する訳でも無い。持ち前の明るさなど持ち合わせていなかったが、経験から来るあきらめと割り切りによって気持ちを切り替える技術を隼人は習得していた。

「さてと……まずは新たな同居人に必要最低限の知識を与えてやる必要があるな……」

あまりに使われない為か、開きの悪くなった電話ボックスの扉を半ば強引に開けると社会の常識を享受すべく自宅への帰路に着くのだった。

と言つても近くの公園のある電話ボックスを使用した為、実際五分も歩けば自宅に到着することができる。帰宅途中、隼人が空にはためくブルーシートに目を奪われた。少し離れたところからだからこそ見える自宅の屋根に張られたブルーシート。なんとも色々な

感情を豊かにさせてくれる気がした。もちろん悪い意味で。

せつかく持ち上げた気持ちも、実害を自分の目で確認した後では心情株価ストッパ安も更新と言う物だ。

重い溜め息をつきながらカンカンと音を立てて登る少し赤茶けた鉄製の階段は、もうしわけ程度にポリカーボネイトで出来た屋根が付けられているが、先日の雷を伴う嵐の影響で元々雨風で脆くなっていた所為もあつてか、その姿は一風前の灯《ふうぜん》の《ともしび》である。まるで、自分のことのようにだと考えた隼人は一層頂垂れた様子で自宅のドアノブを捻るのだった。

隼人が部屋を空けた時間は、ほんの一〇分程度である。しかし、その短時間で部屋の様相は全く別の物に変化していた。板張りの台所は見たこともない金属に変わり、見たことも無い電飾の様な物でチカチカと光っている。畳が六枚引いてあつた部屋も、これまた見たことも無い材質で出来た床材に変更されていて当然のように所々チカチカと光っている。

開いた口が塞がらない。まさにそれを体現したかのように動きを止めた隼人は、冷静になる為に部屋の外にもう一度出ることにした。静かに後ろ手で扉を閉めると、悪いことをして閉め出された子供のよう^{こどもごとく}に部屋の扉の前で蹲^{ひざまづ}った。

「え……つと？　今の光景はなんだ？　部屋が別の世界になっていたよう^{よう}な……そう、まるで未来のよう^{よう}な……未来のよう^{よう}な……！！！」

飛び出す様に跳ね起きた隼人は、扉を壊さんばかりの勢いで開けると、未来的な部屋の中に転がり込んだ。部屋の雰囲気が違う為かはたまた別の理由なのか中の空間も若干本来の物より広く感じられる。隼人は目的の人物をそれこそ目を皿のよう^{よう}にして探した。そして、それは本来押し入れがあつたであろう場所で、鼻歌を歌いながらどこから出したのか料理道具の様な物で料理をしている。見たこともない食材を使つて……蒼い色に紫の斑点が色鮮やかな触角が生

えたカエルの様なもの、とげとげした見た目とは裏腹に柔らかそうな質感の何か、脈動を続ける緑の何か、一見スイカに見えるが何故か人間の様な手足が生えた何か。それらに料理機材なのかレーザ銃のような物で切ったり、焼いたりしている。気のせいか小さく悲鳴のような物が聞こえるし、『助けて』と何故か日本語で認識出来る言葉まで出ていたような気がする。しきりに飛び散る何かの体液なのか果汁なのか、理解出来ない隼人からすれば悪魔召喚の儀式でも見た方がよっぽど精神衛生上宜しいであろう物を見ている認識があった。不意に隼人の存在に気付いたリーナが頬に紫の汁を滴らせながらニコヤかな笑みを浮かべて振り向いた。それを見た隼人が『ひっ！』と小さな悲鳴を上げたのは無理も無いことだ。

「あつ！ 隼人さん！ お帰りになられたんですね！ 思ってたよりお早い御帰りだったので、まだ朝食の準備が出来て無いんですよ…… サツサと片づけちゃいますから座って待ってて下さいね！」

サツサと片付ける為に作業スピードを上げるリーナ、そしてそれに伴って聞こえてくるこの世の物とは思えない効果音と悲鳴のような物。隼人は精魂尽き果てた様子で、どこから出したのか分からない椅子とテーブルのような物の席に着くと、部屋に入った時の元気はどこに言ったのか意気消沈した様子でリーナが席に着くのを待っていた。

料理が終わったのか、どう調理したらそうなるのか理解出来ないが隼人の生活の上で美的感覚的にも大変美味しそうな見た目の豪華な料理が並んでいた。どこをどう見ても蒼い色に紫の斑点が色鮮やかな触角が生えたカエルの様なもの、とげとげした見た目とは裏腹に柔らかそうな質感の何かとか、脈動を続ける緑の何かとか、一見スイカに見えるが何故か人間の様な手足が生えた何かとかは見受けられない。

「あ、あの食材でコレを作ったのか？」

「はい！ 腕によりを掛けて作りましたよ！ 栄養も満点だし！
ただ朝食には少し多かったかもしれないね。張り切り過ぎてしま
いました！ テヘッ」

とりあえず、見た目こそちゃんとしていれば口を付けられるのが
人間の凄ところだ。既に一〇時を回っていたこともあって、隼人
は空腹のピークを迎えていた。恐る恐る一口食べてみる。味覚に対
して過剰なまでのアピールだった。たった一口で口の中には唾液が
溢れ『もつとくれ』と攻め立てる。あれほどゲテモノ宜しくな原材
料を使っているにも関わらず、味付けは隼人の好みにベストマッチ
していながらも初めて味わう味覚に、もはや隼人の手は止まらな
かった。朝食にしてはあまりにも多かった料理だったが、隼人は遂に
は完食し少し物足りないと言え感じてしまう程だった。

「はあゝ……食った食った……ごちそうさまゝってかりーナ料理上
手のな！ 原材料見た時はこの世の終わりかと思っただぞ」

「あの材料は”あちらの世界”から持ち込んだ物で、少し見た目は
悪いですけど、とってもおいしいんですよ！ 隼人さんが気に入っ
てくれてよかったです！」

胃を休めながら徐々に上がる血糖値によって、脳が活性化してい
く。そして、目の前に広がる異世界空間に意識が戻って来たところ
で、隼人は改めてリーナに言うべきことを思い出していた。

「今すぐ部屋を戻せ！！！」

部屋を元通りに戻した後、当初予定していた通りリーナへの教育

が始まった。

リーナへの”こちらの世界”に関する一般常識のレクチャーは最低限の物を教え込むだけで夕方になってしまふ程の物だった。

「とりあえず、こんなところか……案外考えてみると教えなきゃいけない事って色々あるのな……」

「信号機は赤が止まれ、黄色が注意、緑が進め……基本的には隼人さんみたいに黒髪や茶髪が普通、瞳も同様……うう……色々あって大変です……」

「まあ、最初は仕方ないだろうな、しばらくは出掛ける時は俺と一緒に出掛けてやるから、徐々に慣れれば良いよ」

「はい！ 隼人さん、ありがとうございます！」

リーナの真つ直ぐな瞳に少し照れる隼人。

「……そう言えば小さい頃から考えても、こんなに長い事異性と一緒に過ごしたことって無いよな……」

「？ 何か言いましたか？」

「な、なんでもない！」

隼人の慌てように少し小首を傾げながら、リーナは席を立った。

「ん？ どうしたんだ？」

「髪と瞳を隼人さんに合わせるんです。時間は短いですけど八時間くらいなら隼人さんと同じような色合いに変更しておくことが出来ます」

リーナはそう言うと、その奥行きでどうやって入っていたのか疑問になるほど巨大な機械を取り出した。それに何やら入力のような物をしていくと機械が形状を変えて、昔の美容室にあったパーマを

掛ける時に使う機械のような形状になった。そして使い方もパーマを掛ける機械と同じなのか、機械の下に入り込むと上からリングのような物が降りて来てリーナの姿が、リングが通り過ぎたところから見る見る色を変えていく。銀色に近い程の白い髪の毛は栗色に近い茶色に、瞳の色も髪の毛と同様の色に変わっていた。

「どうでしょうか？ 隼人さんに大分近くなったと思うのですけど……」

「そうだな、若干色素が薄い感じがするけど、肌の白さと合わせてみると特別辺でも無いから問題無いだろう」

そう隼人が結論付けた瞬間、部屋のチャイムが来訪者を告げた。隼人は『よっこらせ』と年寄りくさい掛け声と共に立ちあがって覗き穴から外を確認すると、来訪者は大家さんだった。後ろを確認し、すでに機械を隠し終えているリーナを見て『しっかり常識を理解できているな』と確認を取ると、『はい、今開けまゝす』と返答して、部屋の扉を開けた。

大家さんの来訪理由は先日言っていた代わりの部屋の用意に就いただった。ちょうど、同じ二階にある角部屋の住人が引っ越したということ、そこを同じ家賃で使わせてくれるということだった。隼人としても、天井に穴が開いたままで良いわけでもない。二つ返事で了承を返すと、すぐさま引っ越しとなった。

「ん？ 隼人くん、奥にいるの彼女かい？ キレイな子だねえ」

「違いますよ。親戚の子が家出しちゃったとかで転がりこんで来たんです。しばらく部屋に置いておくことになると思いますんで、紹介しますね。 理奈！」

前もって日本名を話し合いで決めておいたのが功を奏し、早速使う機会がやってきた。リーナの伸ばし棒を取ってリーナ、漢字を当て

て『理奈』である。親戚という設定にしておけば、名字も隼人と同じ『高橋』で済むのと、部屋に置いておくのに不自然で無い理由を得る為に調度良かった。

「初めまして大家さん。しばらくお世話になる予定の理奈です。宜しくお願いします」

笑顔で挨拶しペコリと頭を下げるリーナに、思わず目じりが下がる大家さん。

「そうかいそうかい。私は別に構わないよ。あまりうるさくして他の住人の方に迷惑さえかけなければ、何も問題なんてありませんからね。それじゃ隼人君、さっそく移動しようか。コレが部屋の鍵ね。この部屋は修理の為にしばらくは入れないようにしちゃうから忘れ物しないでね」

「何から何までありがとうございます」

隼人は丁寧に深々とお辞儀で返すと早速引越しの準備に取り掛かった。と言っても、基本的に荷物の少ない隼人の持ち物と言えば、大きめの風呂敷に全て収まってしまふ位の物しか無かった。唯一入らなかった物がちゃぶ台と小さな冷蔵庫である。

それらを一纏めにするのと今までお世話になった両お隣さんに挨拶をした。どちらも核家族の家が住んでいて、夏休みに突入した部屋の中は子供が散らかした玩具でごちゃごちゃしていた。どちらも奥さんが出たが、リーナを見る度『彼女?』と聞かれるのだけはどうかにならない物かと隼人は思っていた。

リーナにも荷物を少し持って貰い、新たな部屋へと向かう。もともと使っていた部屋より若干広い角部屋は変則的な七畳間だった。西日が入る窓があるのは少し残念だったが、前の部屋より環境的には良くなったように感じていた。

少ない荷物をサツサと所定の位置に設置すると、お隣さんへの挨拶に出掛けた。普通であれば手土産の一つも持参するべきだろうが、引越してきた時も今も現在のお隣さんは留守にしていることが多く、まともに挨拶できたことも無い。奥様方の話によると夜のお店で働いている女性という噂だ。

隼人は『どうせ今日もいないんだろうな』と思いながら扉に付いているチャイムを鳴らした。自分の部屋にもついている聞きなれたチャイム音が部屋の中で鳴ったことを確認すると、予想に反してパタパタと走ってくる音がした。『へえ……珍しいこともあるものだ。調度良かったけど』と隼人が一人ごちていると扉が開けられた。そこには、ばつちりメイクをした”これから仕事です”と言わんばかりの夜の蝶が一羽いた。

「？ お兄さん、何か用？」

見慣れない夜の世界の住人の雰囲気飲まれていた隼人は、本人からの言葉で我に返ると軽く挨拶をした。

「この度、同じ階の部屋から隣の角部屋に越してきました高橋隼人です。色々とご迷惑をお掛けするかもしれませんが、宜しくお願いします」

お姉さんは隼人を上から下まで見ると『ああゝ例の雷ボーイね』と呟いた。視線が動いたかと思えば、今度はニヤけている。隼人は既に同じ流れを三回も体験しているのだ。予想の範囲だった。

「隣にいる可愛い子は彼女？」

「違いますよ。親戚の子が家出しちゃったとかで転がりこんで来たんです。しばらく部屋に置いておくことになると思いますんで、紹介しますね。 理奈です」

「初めましてお姉さん。理奈です。宜しく願いします」

笑顔で挨拶しペコリと頭を下げるリーナ。

「こちらこそ宜しくね。アタシつてば昼間は寝てるし、夜は仕事だから余り顔は合わせないけど、何かあった時は宜しくね……っていけない！ もうこんな時間じゃん！ 今日は少し早く入って準備しなきゃいけないのよ……というわけで、またね……！」

慌ただしく施錠して走っていくお姉さんは、駐輪場に原付を止めていたのか、ブイ〜という音と共に走り去って行った。

「皆さん、とても良い人達ですね！」

「そうだな、隣のお姉さんは初めて会ったけど、美人だし悪い人じゃなさそうだ。っと、もう外も暗くなつて来たな、朝は作って貰っちゃったし、冷蔵庫はまだ冷えないから食材使っちゃうか！ 晩御飯はお礼に俺が作るよ」

「え！ 良いんですか！？ ”こちらの世界”の料理つて初めてです！ 楽しみ〜」

隼人は冷蔵庫に有った食材を適当に組み合わせてオムライスを作った。リーナはオムライスを気に入ったのか、口の周りにケチャップを付けながら凄い速さで平らげて行った。

今まで一人で食べる晩御飯に慣れていたとは言え、誰かと食べる食事に心が温まったように感じる隼人だった。

第 4 話 携帯電話<For Contact>

リーナがやってきてから二日、小さなことから大きなことまで色々発生したが”こちらの世界”にリーナも徐々に慣れていった。まだまだ細かいところで危うい部分もある、髪と瞳の色を変化させる機械の効果も八時間程度という時間制限がある為、長時間の外出に懸念が残されている。短時間で思いつく限りの教育を施したとは言え、普段隼人自身が常識だと思っていることは意識して思い浮かべようと思っても中々難しいことであり、単純で言われれば当然の様な事でも抜けてしまうことは数限りなく発生した。

しかしリーナの頑張りもあって隼人と暮らす部屋での生活には何ら問題が無い程度までの日常生活的知識は得られたようだった。

さすがに何日もバイトを休んでいると、自分の生活も立ち行かなくなる。ただでさえ食事の量が二倍に増えているのだ。少し心配が残るがリーナを残して午後からのバイトに向かうことにした。

「リーナ良いか？ 誰かが家に来てても基本的に出なくて良いからな？ あと一人で出掛けるなよ！ リーナは大人しく家のことをしてれば良いから。日が完全に落ちるまでには戻れると思う、晩御飯は食べずに待っていてくれ。絶対に火は使うなよ！」

「はい！ 分かりました！ リーナはお部屋の掃除とか、隼人さんがくれた本を読んで勉強しています！」

リーナが両手に抱える隼人が渡した本というのは、以前原付の免許を取る際に購入した学習本だ。自分の財産と言う物をあまり持たない隼人にとって、ただの学習本であろうと捨てるのに躊躇ためらわれた為、なんとなく捨てられずに持っていた物だった。学習本には交通マナーについて細かく記されていて”こちらの世界”をよく知らないリーナには打って付けの教育本に思われた。

なんとなく後ろ髪を引かれる思いを残しながら、隼人はバイト先に向かう道を原付で走りだすのだった。

この原付は隼人にとっては初めて自分で購入した財産らしい財産だった。型落ちで中古だが少し前に人気があつた原付で、まだまだ現役で走れるというのに特価で販売されていたのだ。隼人は自分の^{アンハッピー・アトラクター}不幸体質の性能を十分に理解していた為、中古なんて買った日にはその日の内にエンジントラブルに見舞われてスクラップ置き場に行くように思われたが、新車で購入するようなお金も無いし結局新車で買ってもらいコールにぶち当たるケースも有りうる。そう考えた時、中古原付でも現在問題が無いなら良いかと判断して購入した物だった。しかし、思いのほか何事も無く購入してから二カ月がたったけど使用出来ている。

バイトに雇ってもらってから初めての二連休取得、しかも突然である。事情を分かつて貰っているとは言え、なんとなく気遅れする感が否めないものの二日ぶりのバイトに気合を入れる隼人だった。

「ふんふつふふ〜ん！ ふつふふふ〜ん！」

シャワー室から響いてくるところかずれたリズムを刻んでいるのはリーナが奏でる鼻歌である。リーナが平行世界にある自分の文化圏で流行っていた音楽を少し力の入った鼻歌で奏でつつ、手に抱えた衣類をひっくり返していく。

「このドライッて書いてあるマークは洗濯機で洗っちゃダメってことですね！ こっちのマークはアイロンをかけちゃダメ……と」

すでに一人暮らしも長い隼人にとって家事の力量は同年代の男女と比較しても頭一つ抜きんでている。その隼人から事細かに指導を

受けたリーナの知識はすでに一般的な生活をするにおいて抜かりの無い物となっていた。

「一つ一つ手で洗って行くなんで、まるで石器時代にでも来た気分ですう」

リーナが何気に失礼な感想を言いながら手早く洗濯を進めていると、甲高い音で部屋のチャイムが鳴った。集中力が高いリーナは、洗濯という作業に没頭していたせいで、出掛けに隼人が言った言葉を失念していた。

「はあゝい！ 今開けます！」

扉に付けられたチエーンを外して外を確認すると、そこに立っていたのは昨夜挨拶を交わした隣のお姉さんだった。

「あれ？ 理奈ちゃんだっけ？ 一人？」

「はい！ 隼人は仕事に行っちゃいました！」

「ふゝん……そうなんだ……」

隣に住むお姉さんの瞳があやしくキラリと光る。しかし、それに純粹なリーナはその瞳が表す小さな悪意に気付かない。

「じゃあさ。お姉さんとお出掛けしない？」

お姉さんの提案に少し困った顔を浮かべるリーナ。隼人との約束を思い出し、誰かが来ても出るなど言われたことを思い出したのだ。しかし既に後の祭り、誰かが来ても出るなどと言われたが、一人で出掛けるなど言われていたリーナは、お姉さんと一緒なら問題無いと考え、提案を快諾するのだった。

「良いですよ！ でも、どこに行くんですか？」
「んふつ。イ・イ・ト・コ・ロ！」

お姉さんの運転する原付に道路交通法に違反する二人乗りで向かった先は、少し走ったところにあるショッピングモールだった。部屋からまともに出たことのなかったリーナにとっては”こちらの世界”で初めての外部との接触であり、不安が籠りつつも遥かに期待が勝り好奇心の溢れ出る視線で周囲を見渡していた。

「しかし、もっと良い服は無かったの？ 今着てるのサイズ合って無いし、男物よね？」

「これは隼人さんのお洋服を貸して貰ってるんです。こっちに來たばかりで、ちゃんとした服持っていないですから」

「そんなことだろうと思ったよ。お姉さんに任しときな！ 今朝パチンコで大勝しちゃってパーッと使いたい気分なんだよね！」

運良く警察の視線にも止まらず二人を乗せた原付がショッピングモールに到着した。二輪車置き場にある鉄製のポールに原付を施錠するとモールの中に足を進めた。

「凄いです！ 凄いです！ 凄いです！」

「あはは。あんまハシャグんじゃないよ。危ないからね」

そんな二人が向かったのはショッピングモールの中でも特に女性物のファッションを取り扱う商店が軒を連ねるところだった。

「ここなら理奈ちゃんに似合う服もいっぱいあるだろうね」

「凄いです！ 初めてみる服がいっぱいです！ お姉さん、ありが

とうございます！」

「あはは、全然良いよ。それにお姉さんって、なんだか”こそばゆい”よ。私の名前は越長美由紀こしなが みゆきってんだ。あゝ源氏名げんじなのホタルで
も良いよ。好きに呼んで」

「ん……ホタルさんってキレイな名前ですね！ これからはお姉
さんのこと、ホタルさんって呼びますね！」

ホタルとリーナが手近な店から中に入ると、ホタルと店員による
リーナ着せ替えショーが始まってしまった。

人形のように整った顔立ち、透き通るように白い肌と北欧人を思
わせる栗色の髪と瞳、細いにも関わらず出るところは出ている反則
的なポテンシャル、そしてそんなプロポーションにも関わらず日本
人顔のしかも童顔である。まるでアニメの世界から飛び出してきた
ような見た目の持ち主に店員のテンションは最高潮に達し、お勧め
の商品を持った店員達が順番待ちをする状況になっていた。

「モデルじゃないんですか！？ こんな可愛い子この世に存在する
んですか！？」

「私も初めて見た時は急いでて気付かなかったけど……こりゃ予想
以上だわ」

「うう……なんだか恥ずかしいですう……」

いつの間にか店の前には人垣が出来ており、急遽、モールの一角
に舞台と着替え用の天幕が用意され、ファッションショーが行われ
ることになっていた。悪乗りが大好きなホタルによって提案された
規格だった。しかもモールの責任者が、これだけの集客力があるな
らと打算した結果、利あれど損は無しと判断され実現してしまった
のだ。誰の提案なのかシヨップ対抗着せ替えバトルになり、ホタル
の予算である二万円で可能なトータルコーディネート勝負というこ
とになっていた。審査員は参加するシヨップ店長で、自分の店が提

案した物には点数が付けられないルールに決まった。

「続いてのコーディネイトは！ このモールでもゴスロリファッションとして有名なブランド店！ ブラックレッドチェリーさんのコーディネイトです！！ 全体的に赤のチェックで纏めつつ、黒で締める！ しかし、ところどころに使われるレースで出来たフリルが女の子らしさを引き立てております！」

続々と参加する店も増えていきモールの一角で始まったファッションショーは閉店近くまで続いていた。

「思ったより遅くなっちゃったなあ。リーナ腹減らしてるだろうなあ。悪い事しちゃった」

夜八時も回ると昼の長い夏と言っても、すっかりと夜になっている。申し訳程度に街灯が灯る道を迫る不幸に対処するため、鋭い視線で周囲を警戒しつつ隼人は家路を急いでいた。

「でも今日はハンバーグ弁当を二つもゲット出来たし、小さいのは沢山あったけど大きな不幸もやってきてない。大分マシな一日だったな」

思い返してみればリーナがやって来てからというもの、大きな不幸は訪れていないように思えた。それもリーナがやってきたことによつて屋根に大穴が空くと言う不幸は伴^{ともな}ったけど、部屋が角部屋に変わったのは幸運とも言える。

「なんだかんだ言つて、リーナが来てから悪い事って起きてないん

だよなあ。まあ、偶然なんだろうけどさっ！！　口に羽虫がつくやつぱり不幸は変わんねえな」

小さな不幸に見舞われつつも家に辿り着いた隼人は原付を嚴重に施錠しながら自分の部屋に視線を投げて、ふとした違和感を感じた。

部屋の電気が点いていない。少し遅い昼寝でもしているのだろうか？　そんなことを考えながら軋きしむ階段を上がり、部屋の前に辿り着いた時に違和感は最大の物となっていた。　鍵が開いてる。

隼人は勢いよく扉を開け放つと、すぐさま中を確認した。部屋が荒らされた様子は見受けられない。しかしリーナの姿が見つからない。狭い部屋の中に隠られるようなところは多くない。押し入れやシャワー室を見ても見つからない。部屋が荒らされていないところを見ると、泥棒という線はかなり薄くなったと思う。リーナのよく分からない機械は押し入れの中にあつた。つまり……

「リーナの奴！　鍵も掛けずにどこに行つたんだ！」

それから三〇分ほど経つただろうか、遠くから近付いてくるブイーンという音がしたかと思うと、若い女性二人がハシャイでいるような声が聞こえてきた。

玄関から顔だけを出して外を確認すると、ブランド物を思わせる紙袋やいくつかのビニール袋を持ったリーナと一度挨拶をしたことがある隣人のお姉さんだつた。

隼人は靴を履くこともせず外へ飛び出すとリーナを怒鳴りつけた。

「鍵も掛けずにどこに行つてたんだ！　外には俺が許可するまで一人出るなど言つただろう！？」

「ふえ！？」

いきなり怒鳴りつけられたリーナは一気に涙目に、それを隣で見
ていたホタルが隼人に事情を説明し始めた。

「いや、そんな怒鳴らなくても……理奈ちゃんを連れ出したのは私
なんだ。悪かったよホント。こんな遅くなる予定じゃなかったんだ
けど……。あまりに理奈ちゃんが可愛いから店員さんが”返して”
くれなくてさ。こんなボロアパートに泥棒なんて入らないし、鍵も
別に良いかなあ〜って、ハハッ」

「そういうことを言ってるんじゃないんです！ 理奈は外国暮らし
が長くて、この辺りのことや一般的な常識にも疎い部分があるん
です！ 出掛けた先で何かあったらどうするんだ！」

隼人の反論を聞いたホタルの目が据わる。

「アンタねえ……さつきから氣いてりやガタガタ煩い奴だよ！ ア
ンタ、理奈ちゃんには年頃の女の子に必要な”色々な物”があるん
だよ！ それなのに男物のサイズが合わない服着せてデリカシーの
無い！ 必要以上の心配つてのは迷惑以外の何物でも無いんだよ！」

ホタルの言い分に”ぐう”の音も出ない。考えてみればリーナに
は『一人で出掛けるな』とは言ったけど『出掛ける時は俺とだけ』
とは言っていない。誰かが訪ねてきても開けるなとは言ったけど、
知り合いから声を掛けられれば無意識に対応してしまいそうな物だ。
夏の間この部屋は人がいれば窓は全開で、玄関の近くにある台所の
窓からは訪問者から内部は丸見えだ。

「大体ね！ そんなに心配なら携帯電話でも持たせてあげれば良い
でしょ！？」

まさか、これが理由で携帯電話を所持することになるとは思って

もみなかった隼人だった。

第 5 話 体調不良<Deconditioning>

隣のホタルさんの指摘も最もと感じた隼人は、少ない貯金から捻出して携帯電話を二台購入した。隼人が思っていたより月々の使用料金が安くて済み、同一会社間であれば通話料金も掛からないという点が隼人の家計的にも大助かりだった。

隼人は夏休み突入時に同じクラスの学年人気で五本の指に入る上野菜緒えのなほから渡された携帯電話をすぐさま登録した。取得時の関係で登録番号の一番がリーナになってしまったことが悔やまれるが、二番目に輝く上野菜緒の名前に心がワクワクしていた。

購入してから三日、未だに携帯を開いてはアドレス帳を見てニヤニヤしている隼人を見て、いつの間にか部屋に入り浸るようになった隣人のホタルから辛辣な一言を受ける。

「隼人ってさ、キモイよね」

さすがに隼人も、この一言には”くる”物がある。そして、どういうわけか呼び捨てが定着してしまっていた。

しかし、そのまま黙って攻撃を受け続ける隼人でもない。

「ホタルだって人の事言えるのか？ 毎日、隣の男の家にはっかり入り浸ってさ。彼氏とかいないわけ？」

ホタルの額に青筋が見えた気がした。そう、年頃の女性にはとてもデリケートな問題なのだ。高校生の隼人にとっては彼氏彼女がないという話題は、その辺に転がっている石のようにありふれた物だが、”お年頃”の女性には竜の逆鱗のように触れてはならないタブー中のタブーなのだ。

「私だつてお店に出れば指名だつて入るのよ！ この前なんか金持ちの社長さんと同伴ディナーだつてしたんだからね！」

「そんなバーチャル恋愛未満のことで大きな顔すんなよ！ そして未成年に夜の戯れ暴露してんじゃねえ！」

「同伴にはヤラしい意味なんて含まれてないわよ！」

「そんなの知るか！ それに夜の戯れにどんなヤラしい意味があんだよ！！ そういう風に思うつてことは、そういうことをしてるつてことじゃないのかよ！？」

「してないわよ！」

「二人ともやめてくださあい！」

最近ではリーナが仲裁に入ることが普通になっていた。隼人としても、こういう形は本意ではあるが、隼人以外の人間と接するこゝとで社会への適応力を養えれば御の字である。

それにホタルと口喧嘩するのは、実はそんなに嫌でも無かった。あまり他人と深く関わろうとする方では無い隼人だが、一人が好きなのでも無い。色々事情があつて、普通の高校生活が送れていない隼人には、口喧嘩が出来るほど仲良くなつた友達がいなかったからだ。もちろん学校生活をする上で支障が出ない程度の広く浅い付き合いはあるが、喧嘩をするほど仲良くは無い。ホタルのようにズケズケと言ってくれる人間は毛嫌いされがちだが、口は悪くてもどこか人を心配しているような説教癖があるだけなのだとも思っていた。仲裁に入つたリーナにホタルが『でもさあ』とリーナに答えようとしたところで言葉がつまつた。隼人もどうしたのか？ と視線をリーナに向けると、どこか様子がおかしい。薄らと汗が滲み、色白で透き通るような肌が若干青ざめているようにも見える。

「アンタどうしたの！？ 風邪？」

「えへへ、大丈夫です。少し休んでれば直りますから」

「風邪なら放つておいても大丈夫だろ。俺はそろそろバイトの時間

だから、暑いから少し辛いかもしれないけど暖かい格好して休んでるよ？」

「はい、隼人さん。お仕事頑張って来て下さいね」

隼人はなんとなく後ろ髪が引かれるような気持ちがしたが、稼がないことには今の生活が維持できない。ましてや来月から携帯電話の料金も加わるのだ。隼人は気合を入れると、本日は休みだというホタルにリーナのことをお願いして、バイトへと出かけていくのだった。

「おかしい……」

隼人が大きな違和感を覚えたのは、時計の針が昼を回って三時の休憩時間だった。いつもならキレイにされた厨房のどこから侵入したのか、ネズミに荒らされる惣菜も今日は無傷だ。昼の忙しい時間帯に店の中へ飛び込んでくるスズメバチも、今日は鳴り^なを潜^{ひそ}めている。そろそろ厨房に飛び込んでくるカラスが店先の電信柱に停まる時間帯にも関わらず、影も形も見えない。つい最近同じように平和な一日が過ぎるのかと思えば、大きなしっぺ返しを食らった覚えのある隼人としては、むしろカラスに厨房へ飛び込んできてほしい複雑な心境だった。

「このまま何も起きなかったら……今度こそ俺の頭に雷が落ちるかもしれない……もしかしたら隕石かも……」

休憩時間は三〇分ある。この間に昼に食べ損^{まかな}ねた^{ない}賄^{まか}を食べていた。どういう訳か、今日の賄は隼人が大好きなビーフシチューだった。店長曰く『来月から出そうか考えている新メニュー』らしい。店長

はこんな不幸の塊かたまりである隼人を雇ってくれるような気さくで大雑把な人だが、料理の腕は相当の物だ。そんな店長がどういう訳か、新作メニューに隼人の好物を加えようというのである。隼人にとっては盆と正月がいっぺんに来たような幸せだった。しかし幸せだからこそ、この後が怖い。

なんとなくロッカーに入れてある携帯電話が気になった隼人は、ロッカーへと足を進めた。今まで携帯電話を持っていたことが無い隼人は、普段から気にするという習慣が身についていなかったため、休憩に入ると同時に携帯電話を開くような現代っ子とは少し価値観が違う感性を持っていた。だから、気付くのが遅れた。携帯電話を開くと同時に驚くほどの回数、履歴に保存できる三〇件を全て埋め尽くすリーナからの着信に隼人は背中を伝う嫌な汗を感じていた。

すぐさま慣れない手つきながらも、出来るだけ早くリーナへと携帯から電話を掛ける。隼人とリーナは、お互いに携帯電話の機能に通話以外の関心が無かったから、呼出音は無機質な電子音だ。一定のリズムを刻む音が、焦る隼人の気持ちとは裏腹に悠長に聞こえてイライラが募る。

一二度のコールで携帯電話の呼出音が止む、隼人は誰とも確認せずに声を発していた。

「リーナ！？ どうした！？ 何かあったのか！？」

「何？ アンタ達、二人でいる時は『リーナ』って呼んでるの？
ってか隼人！ 今すぐ帰ってきな！ 理奈ちゃん倒れちゃったのよ！
！ 病院行こうって言っても『絶対ダメ』って言うし、私どうしたら良いか分からないよ！！」

電話口に出たホタルの声に数瞬面喰った隼人だったが、すぐに気を通り直すとリーナの状態を確かめる。

「理奈はどういう状況なんですか！？ 熱があるとか、頭が痛いとか、

か！！」

「え……つと、熱は無いみたい！ 頭も痛くないって！！ だけど、凄い汗なの！ 顔色も凄く悪いし！ 何か特別な病気とか持つてないの！？ 親戚なんですよ？ 何か知らない！？」

「俺は何も聞かされてません。とりあえず店長に聞いて、早退できるか掛け合ってみます！ ホタルさん、悪いんだけど理奈にどうすれば良いか聞いて出来る限りの対処をしてあげて！」

「わかった。何ができるか分からないけど、やってみる！」

それからの隼人の行動は早かった。電話を切るとすぐに厨房へ飛んでいき、店長に事情を話す。大雑把な店長は『良いぞ！ すぐ行ってやれ！ ここは何とかしとく』と二つ返事で許可が出た。コック着を脱ぎ捨てクリーニング業者指定の籠かごに放り込むと、私服に着替えて原付に飛び乗った。

普段、原付を大事に扱う隼人にしては粗雑に見える扱いだった。

アンハッピー・アトラクター

「俺の不幸体質が呼びよせたんなら、リーナじゃなくて俺に来いよ！ このままリーナに何かあったら！ 両親も俺が殺したことになるつちまう！」

隼人の焦りに答えるように高らかに甲高いエンジン音を立てて走る原付は、法定速度を守る気は微塵も感じさせない走りで自宅への道を走り抜ける。平行世界から来たリーナは、医者に見せることが出来ない。基本的な構造はきっと同じだと思われたが、戸籍の無いリーナを医者に連れていくことは出来なかった。自分がリーナのところへ行けばどうにかなるなんて、思えないけど何か出来ることはあるはずだ。そう信じて隼人はリーナの元に急ぐ。

たった一五分ほどの道程みちのりが、隼人には数時間にも感じるほど家への道が遠く感じられていた。やっと到着した古アパートの駐輪場にぶつけるように原付を止めると、施錠もそこそこに軋む階段を駆け

上がる。

一番角の自分の部屋の前まで辿り着いた隼人は、扉を壊さんばかりの勢いで扉を開け放った。

「リーナ！」

隼人の呼び掛けに答えたのはホタルだった。

「遅い！ 何度も電話したのに！」

「ゴメン！ リーナは！？」

隼人の問いかけにホタルは視線を下げる。下げた視線の先には布団に横たわるリーナの姿があった。

もともと色素の薄い肌は、より一層その存在感を希薄にし、まるで虚空にリーナが消えて行ってしまうのではないかと思われるほどだ。

酷い汗で髪が頬に張り付き、青褪めた肌が体調の悪さを物語っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2605ba/>

D N A

2012年1月10日17時54分発行